【　日刊建設工業新聞　平成２５年１１月２０日　】

若手を呼び込む突破口に

女性が現場を変えていく―群馬建協「環境すみずみパトロール隊」

スコープ　建設現場

群馬県建設業協会（会長・青柳剛沼田土建社長）が、会員企業の女性職員の視点を生かして建設現場の改善を図る「環境すみずみパトロール隊」を始めた。青柳会長が支部長を務める沼田支部を皮切りに取り組みをスタートさせ、今月13日には全支部で初弾のパトロールを終えた。延べ111人を超す女性が参加しており、一連の活動は地元マスコミでも報じられ反響も呼んでいるという。キャッチフレーズは「若手人材確保の突破口」。そこにある狙いは何か、青柳会長らに聞いた。

（編集部・牧野洋久）

青柳 剛会長に聞く

―パトロール隊を始めたきっかけは。

「きっかけは労働災害の多発だった。対策を考えていた際、『安全だけを声高に言うのではなく、整理整頓など少し外側にも目を向けてはどうか』と厚生労働省群馬労働局から投げ掛けがあった。そこで、今年1月に沼田支部で女性によるパトロールを試行したところ、男性の技術者とは違った視点で工事現場を見てもらうことができ、現場職員の励みにもなると感じた」

「例えば、休憩所やトイレ、通勤に利用している車にしても、ただ使えれば良いというものではない。『建設業でもこんなにきれいにしているのだ』と親世代の人たちが思うようになって、給与が同じような水準であれば、製造業と同じレベルで人が集まるはずだ」

―取り組みの成果は。

「こうした取り組みの成果は即座には出てこない。だが、英語のヒアリングを思い浮かべてほしい。地道に続けていれば、いつの間にか話せるようになる。それと同じで、女性の視点を生かして少しずつ改善していくことは、会員企業のレベルの底上げになる。気が付いたら、何もやってこなかった企業との間に大きな差が生じてくるはずだ。むちを打ってやらせるのではなく、『きれいにするのが当たり前』という空気に何となく変えていくことが重要で、それは入職促進や離職防止にもつながる」

「現場が少しでもきれいになって整理整頓が進めば、災害の防止だけではなく、品質も向上していく。良い仕事ができれば工事成績が上がり、現場の生産性が向上すれば採算性も高まる。そうした流れに持っていくことが大事だ。発注者も後押ししてくれており、官民一体で進めている」

―業界には今、追い風が吹いている。

「公共工事設計労務単価が引き上げられ、事業量も増えるなど、前向きな風が吹いてきているが、受発注者だけでやりとりをするようでは国民不在になってしまう。われわれは、国民のために道路や橋、建築物などを造っている。エンドユーザーである国民の理解を深めることが非常に大切だ」

「パトロール隊や、女性に参加してもらった道路クリーン作戦は、全国紙の地方版や地元テレビでも報じられ、業界のイメージが徐々に変わりつつある。女性の視点で産業を見つめ直すことは『建設業が何か変わり始めたぞ』というメッセージになる。社会から目を向けてもらうための突破口の一つだと感じている。建設産業に人材を呼び込むには、処遇改善がもちろん必要だが、それだけでは不十分だ。社会の目線が変わるような体質改善の渦を、産業の内側から起こす必要がある」

―少子高齢化で労働人口が減っていく。

「労働人口の減少にもしっかりと向き合わなければならない。キーワードは『多能工』だと考えている。それも、昔ながらの在り方ではなく、省力化した中で機能的に働く多能工だ。単純労働者ではなく、頭を使ってものづくりができる人材を増やすべきだ。そのためには、官民が一緒になって生産性を高めることが不可欠で、省力化も進めていくべきだ。その余地はまだまだある。それは、女性の力の引き出し方ともつながる話だ」

「パトロール隊の参加者からは『やってみたら面白かった』と前向きに言ってもらえている。会社のために貢献したいと思うのは、男性も女性も同じだ。『会社の工事成績を1点でも上げたい』『1万円でも利益を出したい』という気持ちで働いてくれる。男性側が頭で考えて悩むより、まずやってみた方がよい。女性がBIMを駆使してコストから工程まで管理する。そうした活躍の場面も十分に考えられる。どういう人材を確保して、どういう技術力を養っていくのか、それが今ほど問われている時代はない。利益をすぐに出せる即戦力ばかり欲しがるような場当たり的な解決だけを求めていては駄目だ」。

右から青柳会長、パトロール隊の兵藤さん、吉田さん

変化の兆しを発信する契機

現場との一体感高める契機にも

沼田支部のパトロール隊長・兵藤美鈴さん（兵藤建設代表取締役）の話

現場の人が気持ち良く働けるようにするための手伝いができればと思っている。事務所にいる女性職員がパトロールに出ることで、現場との距離感が縮まり一体感も高まる。女性だからこそ気付く点を指摘することで、災害防止にもつながる。皆が前向きな気持ちで参加している。

悪いイメージを払しょくしたい

パトロール隊員の吉田美由紀さん（沼田土建建築部設計係）の話

8年ほど前から自社で女性によるパトロールを始めた。最初に現場に行った時に、休憩所や通勤車両の中が散らかっていて驚いた。しかし、改善をお願いしたらすぐに効果が見え始めた。トイレも最初は本当に汚かった。でも今は、街の人が借りにきても「どうぞ」と言えるくらいになっている。

この業界に入る前の建設業のイメージは決して良くなかった。だからこそ、女性らしい目線を生かして変えていきたい。そうなれば現場の人たちも気持ち良く働くことができる。

建設業界は今、若い人がなかなか集まらないし、入っても辞めてしまい、なかなか定着しない。汚いところには誰も行きたくない。きつい作業があるにしても、より良い労働環境を整えて気持ち良く働いてもらうことが大事だと思う。

パトロール隊の紹介冊子

より良い仕事への好循環を